平成２２年６月１日発行

かまぼこ

第３６号

発　行　地域力推進蒲田西地区委員会
編　集　地域情報紙編集委員会

わがまちの顔

シベリア強制抑留の体験談

蒲田西地区自治会連合会長　小谷野正義さん

今回、取材に応じていただきました西蒲田四丁目にお住まいの小谷野氏は、夏冬を通し一年中お腹にサラシ一反を巻いているそうです。その訳はシベリアで強制抑留時の辛い経験にあると話されました。

小谷野氏が所属する情報通信隊は昭和二十年八月十五日、旧満州地区のスイカという町で終戦を知らされ、直後にソ連軍の捕虜となりました。ウラジオストックから船で帰国できるとの話で、鉄道のあるボタンコウまでは徒歩で移動。日本へ帰りたい一心で夜寝るのを惜しみ歩き続けました。ボタンコウから貨車に乗せられウラジオストックに向かった筈でしたが、何日も貨車で揺られ、着いたところは全く反対方向のシベリアのダイセットという四人を収容している町だったのです。

二十年十月から二十一年十月までの悲劇的な強制抑留が始まりました。ここでの生活は飢えと酷寒とそして重労働の三重苦でした。樹木を伐採し道路を造り、鉄道の線路を敷く作業に明け暮れました。

食事は燕麦の黒パン一切れに、小指の先位のバター、砂糖小匙一杯、コーリャンスープで一日三食、一年三百六十五日、同じメニューでした。

冬は零下四十五度という寒さで、指は凍傷にかかり、色が白く変化して、常にマッサージが欠かせない。寝るときは独りでは寒くて寝られないので、二人一組で外套を脱ぎ、抱き合って、一枚を頭から被り、もう一枚で足元に掛けて寒さを凌ぐ、人間が何とか生きていく限界でした。栄養失調や肺炎のため、朝、目が覚めたら隣の友が冷たくなっていたこともたびたびでした。焚き火をして氷を溶かし穴を掘り、遺体を埋葬しました。

シベリア各地を転々とし、二十一年夏にはバイカル湖近くのマルタ収容所での生活になりました。ここでの仕事は、重さが一トン近くもある原木をトラックに積み鉄道の駅まで運ぶ作業でした。小谷野氏は作業中に、崩れ落ちた原木にはさまれ、背中と足の甲に大怪我を負い、病院に運ばれ、何とか一命はとりとめましたが、帰国後もその時の怪我が原因で、いまだに背中と腰に痛みが走ります。痛みを抑えるためコルセット代わりに六十五年間、一日もサラシを外したことがありません。

「何時になったら日本に帰れるのか」と聞くと誰からもこの言葉が返って来ます。「ヤポンスキー（日本人）スコール（もうじき）ダモイ（帰る）」。

十月になって、ようやく帰国の話が決まり、シベリア鉄道でナホトカに着き、引揚げ船に乗り舞鶴港へ向かったのが十月二十六日でした。船から見た舞鶴の街の景色がまるで箱庭のように美しく眼に映り、全員が感動の涙を流しました。

最後に小谷野氏は語ってくれました。「シベリアの地で多くの同胞が亡くなり、いまだに凍土の下に眠っている。この事実を次世代の人達に語り継ぎ、決して風化させてはいけない。」

（取材　柏村、前田、石渡、塩田委員）

ご存知ですか？　古川薬師・安養寺

今回はお隣の六郷地区（西六郷二―三三―一〇）にある古川薬師を採り上げました。古川薬師というのは通称で正式名を医王山世尊院安養寺といい、行基（六六八～七四九）が開創したという伝説も残っています。行基開創伝説は各地に残っていて、その真偽の程はわかりませんが、ここも古刹であることは間違いなく、境内には貴重な寺宝や遺跡が数多く残されています。

江戸時代には江戸近郊散策の名所として知られ、池上本門寺、新田神社、川崎大師とともにここを巡拝するルートがあったようです。門前には古川薬師道道標が建っていますが、これはもともと東海道の雑色から多摩川道に入る分岐点に延宝二年（一六七四）に建てられたものを移設したものです。この道標からも当時参拝者でにぎわっていたことが偲ばれます。

旧の寺域がかなり広かったことは『江戸名所図会』を見てもわかります。しかし、境内の大部分が大きく湾曲した多摩川の河川敷内にあったため、明治末から大正期の河川改修によって現在地に縮小移転、正徳五年（一七一五）に建てられた本堂を始め、諸仏像、石碑などすべてが移遷されました。

寺宝として何といっても第一に挙げられるのが、藤原期（十一～十二世紀）の作といわれる薬師、釈迦、阿弥陀の木造三尊座像です。都の重要文化財に指定されているだけあって、素晴らしい出来です。古くはそれぞれ別堂に安置されていたようですが、三尊ともにそろっているのは都内ではここと国分寺だけだそうです。普段は非公開ですが、開扉されるときがありますから是非拝観してみてください。

本堂に向かって手前右側には銀杏折取禁制碑が建っています。江戸時代にはここに太い銀杏の木が二本立っていて、天平五年（七三三）に光明皇后がお乳が出るようにと祈られた故事にならい、銀杏の枝を折ったり、下垂れの「乳」を削り取るものが多かったようです。それを禁止するために元禄三年（一六九〇）に建てられたもので、区の文化財に指定されています。

そのほかにも三十五体の仏像群（非公開）、富士講碑など見るべきものが多くあります。散歩の足をちょっと伸ばしてみませんか。

（取材　都築、多田委員）

編集後記

今回の「わがまちの顔」でご紹介した小谷野さんは、蒲田西地区自治会連合会長として、地域のためにご尽力いただいています。今回は戦争での体験をお伺いしました。戦争を知らない世代にその悲惨さを伝えていただく貴重なお話でした。

「特集」と「ご存知ですか」では、昔の多摩川周辺の様子を垣間見ていただけたのではないでしょうか。

情報紙に対するご意見やご感想、また投稿などを事務局までお寄せください。

事務局　蒲田西特別出張所
大田区西蒲田七―十二―七
（三七三二）四七八五

蒲田西特別出張所管内

人口	男	29，970人
	女	27，340人
	計	57，310人
世帯		31，079世帯

平成２２年５月１日現在

特集『原町の昔』

新編武蔵風土記稿

江戸時代後期の文化・文政（一八〇四～一八二九）時代に編纂された新編武蔵風土記稿の中で、荏原郡六郷領、原村について次のように記されている。

原村　原村は郡の南の方多摩川の涯にあり、家数三十七、東は道塚村につづき、南は橘樹郡小向村に隣り、大抵多摩川を界とす、西は古市場に接し、乾の方は今泉村に及び、北は安方村なり、この餘隣村道塚村の内に飛地あり、東西七八町、南北六町餘、村内すべて地低くして土性は黒眞土なり、當村のひらけしはふるき世のことゝ見えて、応永年中鎌倉管領満兼より、鶴岡八幡宮へ社領寄付せられしときの文書にのする、六郷保の内原郷と云うは此所なるべし、（一部省略）

小名　志多田耕地　村の巽多摩川の岸を云う（一部省略）

諏訪社　除地二畝二歩、村の北の方にあり、前に石の鳥居をたつ、これも東福寺もち、

東福寺　境内一段二畝十三歩、村の北の方にあり、新義真言宗同郡高畑村宝幢院末、諏訪山無量院と號す、開山詳ならず、中興開基栄感天和元年四月二十五日示寂す、客殿三間に五間、本尊阿弥陀如来を安ず、立像にて長二尺三寸ばかりか（以下省略）

六郷保の内原郷

応永年間（一三九四～一四二八）関東管領の足利満兼が六郷保の内原郷の代わりに、入東郡（入間郡）内灘波田小三郎入道跡を鶴岡八幡宮に寄進する、と書かれている。この文書から、当時原村は六郷保の内原郷として室町幕府の管領下にあったことを示している。

小名　志多田耕地

小名とは小字のことであり、村の巽（辰巳）とは南東方向である。明治十九年に発行された荏原郡の地図を見ると多摩川を隔てた対岸に原村飛地がある。また記稿に書かれている「隣村道塚村の内に飛地あり」の飛地は、かつての町名でもあり、現在は学校名として残っている「志茂田」付近のことで、昔は「原志茂田」と呼ばれていた時代もあった。

地名「原」の由来

平安時代末期より鎌倉時代初期にかけ、上野国（群馬県）発祥の豪族新田氏一族が関東一円に勢力を伸ばしていた。

原村、今泉村、小林村、この三地名は関東地方に多い地名で、ざっと数えるだけでも原三十一、今泉十五、小林も十四あるが、大田区の場合は女塚、市ノ倉と同様に新田氏（岩松、脇屋も含む）の周辺地域支配の時代に上野国から移動してきた地名と思われる。即ちこれらの三地名はいずれも新田氏の本拠地である群馬県新田郡とその周辺の地域にあり、この村名を苗字にした武士達が大田区の新領域に自己の苗字を冠したか、或いはこれらの村からの移住者が出身地の地名をその入植地につけたのではないかと推測される。

町名の変革

明治二年（一八六九）廃藩置県により品川県が置かれ、荏原郡はこれに属する。品川県荏原郡原村に。

明治四年（一八七一）品川県が東京府となっても、江戸時代以来の荏原郡原村で呼ばれていた。

明治二十二年（一八八九）に市、町村制にもとづいて蓮沼、小林、道塚、原、安方の五村は矢口村に統合された。矢口村大字原となる。

昭和三年（一九二八）町制により矢口村が矢口町と改称。

昭和七年（一九三二）に東京市に編入され、矢口、蒲田、六郷、羽田の四か町が蒲田区になり町名が原町となった。東京市蒲田区原町。

昭和十八年（一九四三）東京都制により、東京都蒲田区原町。

昭和二十二年（一九四七）大森区と蒲田区が合併して大田区となる。

昭和四十二年（一九六七）住居表示実施により、原町全部と古市町の一部、古川町の一部を併せ大田区多摩川二丁目となる。

原村人口の推移

「新編武蔵風土記稿」より江戸時代後期の戸数は三十七と記されているが、その後の推移を見てみる。

明治十八年　戸数　四〇戸
　　人口　二八一人
大正十三年　戸数　一七八戸
　　人口　六五七人
昭和六年　戸数　六〇〇戸
　　人口　二五六〇人
昭和六十三年戸数　二四五三戸
　　人口　六二四九人
平成二十一年戸数　三〇五一戸
　　人口　六三七九人
（多摩川二丁目町会）
　　戸数　四七五戸
　　人口　一一九〇人
（トミン多摩川二丁目自治会）

本来の原村は、土壌に恵まれ、米、麦、野菜のほか、桃、梨、梅等の農産物を生産する長閑な農家地であったが、原村梅園（本紙第七号）や矢口火力発電所（本紙第二十三号）等の施設ができ、周囲の村にくらべ純農村とは多少異なる様が見えてきた。

大正十一年に池上線が、大正十二年には目蒲線が開通し、昭和に入ると耕地整理による道路交通の改善によって住宅地として発展し、急激に人口が増加した。

大正十四年、現在の多摩川二丁目二十四番、多摩川に沿う広大な敷地から矢口火力発電所が撤収し、その跡地に、中央工業、城南印刷工業が操業していたが、昭和二十年四月に米軍の空襲で消失する。その土地に昭和三十二年、昭和電工中央研究所が設立された。（平成五年に移転）

同番地敷地内には現在、大田区の施設である区立多摩川保育園、区立多摩川図書館と、東京都住宅供給公社の賃貸住宅である、

トミンタワー多摩川二十五号棟（九階建、六十二戸）
トミンタワー多摩川二十六号棟（二十五階建、三百九十三戸）
トミンタワー多摩川二十七号棟（五階建、二十戸）
民間マンション、多摩川芙蓉ハイツ（十四階建、三百八十九戸）

が群立する。

多摩川二丁目二十四番内には現在八百六十四世帯の人々が暮らしているが、つい二百年前の原村全部で三十七世帯であった。世の移り変わりに驚愕させられる。

多摩川の水害

多摩川は昔からたびたび大洪水をおこしているが、多摩川沿いの原村はその都度大きな被害を受けていた。近代では明治四十年八月十日、六郷橋を流失し民家を流し、農作物に甚大な被害を与えた洪水があったが、その三年後の明治四十三年には、それを上回る大洪水がおきた。気象庁の記録によると、東京付近は八月八日から豪雨が続き、特に十日は百四十六ミリを記録している。堤防は数か所で決壊し、現在の大田区一帯から川崎側も氾濫し、池上山下より大森、蒲田、六郷、羽田方面は海に至るまで濁水があふれ、鶴見末吉の岡から池上の岡までの一面が泥の海になった。被害者八十万六千人、浸水戸数十九万五千戸、死傷者百六十二名という記録が残っている。

諏訪神社

新編武蔵風土記稿に記されている諏訪社は二百年以上前の様子である。所在地は変わらずとも、社殿は何回か建て替えられているはずだ。

言い伝えによれば、およそ六百年前の創建といわれる。当初上諏訪と下諏訪は約三丁（約三百メートル）離れていた、上諏訪には健御名方命（タケミナカタノミコト）、下諏訪には八坂戸売命（ヤサカトメノミコト）を祭神としていたが、明治十三年（一八八〇）二月に上諏訪即ち本社に合祀した。

平成十四年、社殿、社務所とも鉄筋コンクリート構造に建て替えられ、活発な地域活動の拠点となっている。

参考文献
新編武蔵風土記稿
大田区旧村地名の由来
大田区史、矢口町史
大田区の神社
矢口小学校七十五周年記念誌

（取材　都築委員）